

ラインハルト・コゼレックの歴史学的人間学⁽¹⁾

遠 藤 健 樹

1. はじめに

歴史学者ラインハルト・コゼレック (Reinhard Koselleck 1923-2006) は、戦後ドイツの歴史学研究において「概念史 (Begriffsgeschichte)」というプロジェクトを立ち上げ、大部の事典『歴史的基本概念 (Geschichtliche Grundbegriffe)』を編集したことで記憶される。コゼレックが残した仕事は、いずれも学際的な性格を色濃く持つものであり、さまざまな学問分野に刺激を与えた。とりわけ、その歴史理論は、ハイデガー学派の哲学者、具体的にはハイデルベルク大学で師事していたハンス・ゲオルク・ガダマーやカール・レーヴィットからの影響を強く受けていたこともあり、哲学研究者の目にも魅力的なものに映る。本稿では、コゼレックの歴史理論に認められるハイデガー学派の影響について整理してみたい。

この作業にとってさしあたり手掛かりとなるのは、コゼレックによる八五年の講演がもたらした論文「歴史学と解釈学⁽²⁾」である。ガダマー八五歳の誕生日を記念して行われたこの講演は、ハイデガーの現存在分析と歴史性についての議論を拡張し、コゼレック自身の歴史理論を基礎づけようとするものであった。興味深いことに、この歴史理論、すなわちコゼレックのいう「歴史学的人間学 (historische Anthropologie)」は、レーヴィットの議論を参照しながら、ガダマーによる解釈学的な歴史学理解を退けるものとして提起されている。したがって、コゼレックに認められるハイデガー学派の影響を整理するためには、歴史学的人間学が、レーヴィットとガダマーのあいだにどのように位置づけられるかを明らかにすればよいはずである。⁽³⁾ そのためには、この講演のなかで

重要な役割を果たした「対立対 (Oppositionspaar)」という観念に着目することが肝要である。対立対、あるいはこれに類する「対立概念 (Gegenbegriffe)」や「非対称的対立概念 (asymmetrische Gegenbegriffe)」といった観念をこそ、コゼレックはレーヴィットから引き継いだと思われるためであり、また、この対立対の哲学的性格をめぐってコゼレックはガダマーと争ったためである。

以下では、論文「歴史学と解釈学」を検討し、対立対の成立にレーヴィットがどのように寄与したか確認することからはじめた (第二節)。ついで、対立対の哲学的性格に関し、コゼレックがガダマー流の解釈学からどのように距離をとったか確認する。その際、ガダマーによる八七年の論文「歴史学と言語⁽⁴⁾」に触れ、そこでガダマーがコゼレックに示した疑念について確認する (第三節)。あらかじめ言っておくと、コゼレックはくだんの対立対を非言語的なものと考えたが、ガダマーはこうした想定に疑念を抱いていた。そこで、対立対における非言語性とはなにを指すものであるかはつきりさせるため、最後に七五年のコゼレックの論文「非対称的な対立概念という歴史学的—政治的ゼマンティクについて」(以下、「対立概念」と略記) を検討し、対立対と密接な関わりのある対立概念および非対称的対立概念の性格について確認する (第四節)。

2. 「歴史学と解釈学」における対立対

まずは論文「歴史学と解釈学」第一部での議論をまとめる。

コゼレックは第一部の冒頭で、望ましい歴史学の理論を作り上げるためにはハイデガーの現存在分析を受け継ぐことが有効であるとしている。知られるように、『存在と時間』で試みられた現存在分析からは、現存在に認められる歴史性 (Geschichtlichkeit) を解明するための議論が引き出されるので、ここから出発することにより、歴史的出来事の存立要件と、歴史的出来事の理解を任務とする歴史学の成立要件を明らかにできるとされているのである (ZS, 99)。しかし、ここで注目すべきは、こうした主張に一定の留保が付されているということである。つまり、「事実的な諸歴史 (Geschichten)」が可能となる条件を明らかにするには、(ハイデガー自身の考えには反するものの) 現存在分析は「人間学的に」補完されなければならないというのである。なぜならば、コ

ゼレックからすると、事実的な諸歴史は「間人間的 (zwischenmenschlich)」なもの、複数の人間の相互関係からなりたつものであるのに対し、ハイデガーの現存在分析はあくまでただひとりの現存在における歴史性を明らかにするに過ぎないとされているからである。かくして、ハイデガーが現存在における歴史性を明らかにするべく導入した「被投性」と「死への先駆」という二つの概念は、複数の人間の相互関係を適切に掬い上げるために、「われわれの有限性の経験における時間的地平をより先鋭化し、いずれにせよ別のかたちでも規定するさらなる対立対」によって補完されなければならないとされる。事実的な諸歴史においては、「ひとりの『実存』には還元されないような、独特の有限性を含みこんだ差異の規定 (Differenzbestimmungen) が問題となる」ためである (ZS, 101)。

このような現存在分析の人間学的補完について論じる際に引き合いに出されたのが、他ならぬレーヴィットであった。

「現存在」としての人間は、その隣人＝共同的人間 (Mitmenschen) ——これはレーヴィットの主題ですが——に対して開かれた態度をとっているわけではまだないし、同類との闘争の可能性に捕われていないわけでもありません。歴史の諸時間は、「現存在」としての人間において展開される実存論的な諸様相とは同一ではないし、そこから完全に引き出しうるものでもな
この点です。(ZS, 100f.)

この引用の含意を正しく見てとるには、レーヴィットが『隣人という役割における個人』(以下、『個人』と略記⁵)で展開した哲学的人間学を参照しなければならない。

『個人』でのレーヴィットもまた、ハイデガーの現存在分析に独我論な欠陥を見出し、それが他者について適切に論じえないことを批判していた。そのうえでレーヴィットは、ある種の役割存在論的な他者論を提示してみせている。

要点のみ確認すると、おおむね次のようになる。すなわち、現存在ならぬ「人間的現存在 (menschliches Dasein)」は、みずから
の出会い他者たち、あるいは、そうした他者たちからなる「共同世界 (Mitwelt)」を、さしあたりは役割間の関係 (Verhältnis)

によって分節化されたものとして理解している。たとえば、ある者がひとりの他者を「夫」という役割を担う者として理解する場合、この「夫」としての理解は夫婦という役割関係によってあらかじめ規定されているので、そこには非明示的ながら、対応する「妻」としての役割についての理解もつねに既にも含みこまれていくのである。レーヴィットによれば、同じようなことは、「親」と「子」、「軍人」と「文民」、「老人」と「若者」といったものについても当てはまる。だから、共同世界は、いわば共属関係にあつて対となる二つの役割によってあらかじめ分節化されていると見なされることになる(SSI, 66ff.)。もっと言えば、ある者はみずからが会おう他者を、みずからとの関係において有意義なものと規定し、翻つてはみずからをもそうした他者との関係において有意義なものと規定している。たとえば、「父」と「子」の役割関係を例にしてみると、子は「父に対しての子」として規定されるものである以上、父が子を「しかじかの性格を持つ者」として理解する場合には、父はそれに対応して自身を「しかじかの性格を持つ者」と見なしているはずであり、子についての理解には父の自己理解なにかが反映されているのである(SSI, 87f.)。ある者と他者がものごとの理解に際してともに相互に規定され合う存在性格を持つという点で、人間的現存在では「共同相互存在 (Miteinandersein)」が問題となる。これが『個人』の基本的な主張であつた。

以上を踏まえると、先の引用においてコゼレックがレーヴィットに言及したのは、複数の人間的現存在の交渉から生じる「諸歴史」を視野に収めるべく、ハイデガーの議論を共同相互存在論的に拡張しようとしたためと思われる。このことは、現存在分析を補完するため導入された「さらなる対立対」を確認すればはつきりするだろう。

先の引用では、現存在としての人間は隣人との闘争状態にあるものであると示唆されていた。コゼレックが描き出そうとする歴史は、複数の人間のあいだで闘争が繰り返られるアンタゴニスティックなものということになる。それに伴つて、対立対も、単なるひとりの現存在における自らの死への先駆というより、ある者と他者との闘争が引き起こす暴力死の可能性を描き出すものに変貌している。対立対として列挙されるのは、次の五つのカテゴリーであつた。すなわち、(1)「死なねばならぬこと (Sterbennüssen)」と「殺しうること (Tötenkönnen)」(およびこの二つをまとめたカテゴリー「殺害しうること (Tötschlagenkönnen)」)、(2)「友 (Freund)」と「敵 (Feind)」(3)「内 (Innen)」と「外 (Außen)」(ならし「秘密 (Geheimnis)」と「公共性

(Öffentlichkeit)。(4)「男 (Mann)」と「女 (Frau) (および)の二つをまとめたカテゴリー「生殖性 (Generativität)」。(5)「主 (Herr)」と「奴 (Knecht) (ないし)「上 (Oben)」と「下 (Unten)」である (ZS, 101ff.)。見られるとおり、いずれのカテゴリーも対となるようかたちづくられている。こうした一連の対は、ある者と他者が関係に即し相互的に規定されているという人間的現存在におけるあの二重性を、闘争の場面に適用した結果と言えるだろう。すなわち、闘争において人間は、死なねばならない者として、また殺しうる者として、相互規定的な存在可能を身に帯びる (ZS, 101ff.)。友と敵は、こうした相互規定的な存在可能の下で人間同士が自己組織化するひとつの様式に他ならない (ZS, 102ff.)。同時に、友と敵の対立は空間的な分離を、つまり自己組織化と相互排除により領域的な二つの行為単位を産み出すことから、内部と外部という対立項も生じてくる (ZS, 104ff.)。あるいは、闘争の結果成立する社会的ヒエラルキーは、上と下、支配と被支配、古い言い方では主と奴という対立項によって記述されるべき状況を産み出すだろう (ZS, 108f.)。

さて、コゼレックによると、歴史学とは「なにゆえ歴史が出来るのか」、「どのように歴史の出来は達成されうるのか」といった問いに納得がいく答えを示すための基準を明らかにするものである (ZS, 99)。アンタゴニスティックな歴史に即してこの課題を達成しようとするなら、くだんの五つの対立対は、「可能的歴史の諸条件 (Bedingungen möglicher Geschichte)」(ZS, 99)、「可能的諸歴史にとつての一種の超越論的カテゴリー」(ZS, 103)として、研究のなかで解明されるべきものを形式的に表示する基準となる。ここで注意しておきたいのは、これらの対立対が「前言語的メルクマール (vorsprachliche Merkmale)」(ZS, 99)とされていることである。対立対とは前言語的なものを指示するためのものであるとする発想は、「歴史学と解釈学」を通して一貫して強調されている。しかし、それはなにゆえだったのだろうか。

3. コゼレックとガダマーの対立

対立対の前言語的性格については、雑駁に言えば次のように説明できるだろう。すなわち、歴史学者は歴史的なことからを明ら

かにするために、言葉によって書かれた史料テキストに関わる。しかし、歴史学が解明すべきことがらは、いわば字面の背後に控えるものだ、ということである。

このことを明らかにするため、コゼレックは論文「歴史学と解釈学」第二部でガダマーの『真理と方法』を引き合いに出している。『真理と方法』第二部第二章第二節Cでは、言葉によって書かれたテキストを扱う精神諸科学（法学・神学・文献学・歴史学）が比較された上で、一見すると大きく異なるように思われる精神諸科学も、結局はテキストの解釈実践においては共通した性格を持つものであると結論づけられている（GW1, 330ff.）。とはいえ、コゼレックはこうした結論そのものを引き受けたわけではなく、ガダマーが通りすがりに触れたに過ぎない精神諸科学間の違いの方に注目している（ZS, 114f.）。

とりわけ重視されたのは、歴史学と文献学の比較である。歴史学と文献学は、性格を大いに異にするように思われる。なぜなら、文献学が史料テキストそのものを整合的に理解しようとするものであるに対し、歴史学は史料テキストが「表現 (ausdrücken)」したり「漏らす (verraten)」こと（筆者がどのような党派に属していたかとか、どのような信念を抱いていたか等々）を明らかにしようとするものだからである（GW1, 341）。「歴史学と解釈学」でのコゼレックは、自説を支持するためにこの箇所を利用してきるものと考えている。つまり、「歴史学者は元来、テキストからそのテキストの背後にある現実 (Wirklichkeit) を探り出すため、単なる証言としてのテキストのみを用いている」(ZS, 116)というのである。その上で、くだんの対立対という前言語的なメルクマーは、史料テキストが漏らす背後の現実を指示するためのものであるとされる⁽²⁷⁾。

〔歴史学で〕いつも問題だったのは、前言語的・言語外的構造 (vor- und außersprachliche Strukturen) に狙いをつける諸規定でした。というのも、内部と外部、上と下、より先とより後といった一般的な形式的規定、また敵と友、生殖性、主と奴、公共性と秘密といった具体的な形式的規定でいつも問題となるのは、なるほど言語に媒介されているはずだが、ことがらからすれば言語による媒介に埋没してしまうわけではない、なにか独特なものである存在様式に狙いをつけるカテゴリー的規定だったからです。つまり問題となるのは、理解とか概念把握といったものをはじめて引き起こすような、可能的諸歴史におけ

る存在様式に狙いをつけるカテゴリーなのです。(ZS, 112)

このような主張を踏まえつつ、コゼレックは引き続いて歴史学を解釈学から峻別しようとする。

だとすれば、解釈学はあたかもある出来事に反応するように申し渡されているようなものですが、この出来事は歴史学によって理論的にあらかじめ見積もられているということになります。単純化して言うと、歴史学が行為連関を、つまり言語外の領域にある有限性の諸形式に注意を促す一方で、解釈学は「行為連関や有限性の諸形式」の理解に注意を促すのです。(ZS, 112)⁽⁹⁾

つまりここでは、史料テキストの漏らす前言語的な行為連関を説明するものこそ歴史学であり、行為連関についての理解を彫琢するものこそ解釈学である、という区別が立てられているわけである。

そのうえで、コゼレックは歴史学と解釈学の絡まりについて、あらためて次のような留保を付している。すなわち、なんらかのことがらについて理解し、歴史記述をなそうとする「みすばらしい歴史家」は、伝承の流れのほとりに佇んでおり、さまざまな論者(プラトンからカール・シュミットまでの論者の名前が挙げられる)が現実を理解するべく書いた理論的テキストが流れてくれば、それを拾い上げて流用する。この場合、歴史家は言葉によって書かれた理論的テキストを整合的に読まなければならず、その限りでは解釈学的にふるまうことになるだろう、というのである(ZS, 112)。コゼレックは、歴史学的人間学で用いる「友と敵」や「主と奴」といった対立対を、過去の思想家がことごとを記述するために用いていたものから受け継いだ(前者はシュミット、後者はヘーゲルから)。そのため、いま述べたような、本人曰く「ピンボケしたメタファー」が引き合いに出されたのであろう。とはいえ、こうした「歴史学の言語的な生成」(ZS, 112)を重視しすぎると、歴史学はまたしても解釈学に包摂されてしまう。コゼレックは、解釈学が言葉で書かれたテキスト一般に関わる限りにおいて、歴史学をもみずからの一分枝にしかねないことを懸念

していた（「ガダマーの解釈学は暗黙裏に、部分的には公然と、歴史学を包摂するという要求を含んでいる」（ZS, 98））。結局のところ、歴史学の言語的な生成について言及は、歴史学が前言語的な行為連関を説明しようとするものであるという主張そのものを退けるほどのものではなく、歴史学を解釈学から区別すべきであるという主張の方が堅持されることになる。

以上のコゼレックの考えに対して、ガダマーは論文「歴史学と言語」で疑念を呈している。まずガダマーは、コゼレックの歴史理論が「対象世界とその認識（Gegenstandswelt und ihrer Erkenntnis）」（GW10, 327）という二つのカテゴリーを温存しているのではないかと指摘した。こうした指摘がなされたのは、行為連関が理解を引き起こすとするコゼレックの物言いに、理解から独立した対象世界としての行為連関が想定されているのではないか、という疑いを抱いたためであろう。「コゼレックの『歴史学』は、人間の認識における巨大な対象領域を分節化するという、普遍的なものに関するカテゴリー論を作るには役立つ」（GW10, 327）という文言からも、こうした疑念が透けて見える。『存在と時間』における理解についての議論を受け継いだガダマーからすると、現存在は理解しつつ交渉することで世界そのものを開示するのであり、そうした交渉には、行為を通じたひとやものとの交渉も当然含まれる。加えてガダマーは、実は理解そのものが言語による媒介を経てはじめて成立するものであると想定していた。したがって、理解を含みこんでいるはずの行為連関が前言語的であるという主張は不可解であったし、そうした前言語的な対象を言葉によって書かれた理論的テキストがあらためて把握するというのでは、言語をなにか別の対象を指示するために主体によって利用される道具と捉えかねず（Vgl. GW1, 416ff.）、不当であると思われたのであろう。

理解という課題はまさに、あらゆる人間の行為や人間の創造行為における基礎的な存在制約のことも想定している。解釈学が中心に据えている言語性とは、単にテキストの言語性のことではない。それはまさに、あらゆる人間の行為や創作にとつて基礎的な存在制約なのである。（GW10, 328）

以上のようなガダマーによるコゼレックへの疑念のうち、コゼレックにおける言語観の狭隘さを指摘したものについては当を得

たものだとさえよう。しかし、行為連関が対象世界と捉えられているという指摘についてはあまり納得がいかない。すでに確認したように、コゼレックの対立対がレーヴィットの共同相互存在論から読み解きうるのだとしたら、これは世界ないし共同世界に関する理解の分節化様式を表すものと見なした方がよいはずである。そこで改めて、コゼレックの歴史学的人間学において対立対は正確にはどのように位置づけられるべきなのか、また、その前言語性とはそもそもなにを指しているのかについて検討してみなければならぬ。

4. 非対称的な対立概念⁽⁹⁾

以下では、対立対と密接な関係がある対立概念ないし非対称的な対立概念を取り上げてみたい。コゼレックは論文「対立概念」の「方法的序文」冒頭で、おおむね次のように論じている。すなわち、人間が「自分自身に与える呼称 (Selbstbezeichnung)」と「他者に与える呼称 (Fremdbezeichnung)」では「ある人格のアイデンティティーと、ある人格が他の人格に対して持っている関連性 (Beziehung) が分節化されている」。この二つの対になる呼称こそ、対立概念にほかならない (VZ, 211)。ここでは「関連性」という用語が用いられているが、内容からすると、自己呼称と他者呼称からなる対立概念が関係 (Verhältnis) に即した相互共属性を示していることが指摘されているように思われる。したがって、これもまた人間的現存在間の共同相互存在の性格について述べたものである⁽¹⁰⁾。その上で、重ねてコゼレックが指摘するのは、対立概念こそ史料テキストに読みとられる具体的な言語表現であるが、歴史家は研究に際してこうした言語表現を真に受けるわけにはいかないということであった。歴史家はなんらかの政治的行為単位の運動を明らかにしようとする際、史料テキストに書き残されている行為単位の用いた自己呼称と他者呼称を手がかりにするだろう。しかし、その際には細心の注意が必要になる。

この歴史的運動への参加者は対立概念を用いることではじめて歴史的運動を経験したり概念化したりするが、歴史的運動が

こうした対立概念によって十分に認識されることなどありえないのである。そうなってしまえば、結局のところ、勝者の歴史を書き続けることになってしまっただろう。一時的に突出した勝者の歴史の役割は、敗者の否定を通じて様式化されるのを常とするものである。(VZ, 214)

論文「対立概念」では、言語表現に関するヘゲモニー闘争が考慮されており、残存する一般的な概念はそれを勝ち抜いたものと捉えられている。ここでも論文「歴史学と解釈学」と同様に、史料テクストとそれが漏らすものとの区別、言語的なものと前言語的なものの区別が強調されているわけだが、前言語性は端的に、ヘゲモニー闘争を通じた世界についての理解の水路づけを指すものとされている。

コゼレックからすると、歴史家が積極的に語らなければならないのは、こうした水路づけに他ならない。そこで手掛かりとなるのが、呼称を用いる者同士の「相互承認 (gegenseitige Anerkennung)」とその欠如の問題であった。コゼレックによると、ある呼称を用いるにあたって自己と他者の双方が合意している場合もあれば、他者に対して一方的に侮蔑的な呼称が与えられる場合もある。前者では、「相互に承認された名称 (gegenseitig anerkannte Namen)」が口にされるが、後者ではこうした相互承認の欠如した名称が口にされるといふ (VZ, 211)。ここで注目すべきは、相互承認の欠如こそが対立概念に非対称性を持ち込むものであり、しかも、この非対称性は対立についての分類の「一方向的」な適用によって生じる、とされていることである。

一方のケースではそれぞれの人格における自己呼称と他者呼称は合意に基づくが、他方のケースではこの同じ人格における自己呼称と他者呼称は異なっている。一方のケースでは相互承認が言葉の上で含意されているが、他方のケースでは呼称に軽蔑的な意味合いが浸透しており、そのため相対している者たちは確かに呼びかけられ合っているが、承認された状態ではありえない。このように、ただ一方向的 (einseitig) にのみ適用でき、不等なかたちでなされた対立的分類が、ここでは「非対称的」と呼ばれる。(VZ, 211)

非対称的対立概念の例として挙げられているのは、「ギリシヤ人と野蛮人 (Hellenen und Barbaren)」、「キリスト教徒と異教徒 (Christen und Heiden)」、「人間と非人間 (Mensch und Ummensch)」(ZS, 103) とらう三つの事例である。これらの非対称的対立概念が相互承認を欠如しており、対立についての分類の一方的適用によって成立するということは、何を言わんとするものなのか。

このことを説明する際にも、レーヴィットの哲学的人間学はよい見通しを与えてくれるように思われる。先に触れたように、レーヴィットはある者と他者がものごとの理解に際してともに相互に規定され合う存在性格を持つことを、役割関係に即して論じていた。『個人』ではこの人間的現存在の相互共属性が、さらに一種の対話論にまで展開されている。そこでは、ある者がみずからの出会う他者の語るこがらを理解しようとする場面が取り上げられていた。レーヴィットによると、ある者は他者の語るこがらを、あらかじめみずからと他者との関係において有意義なものとして理解している。したがって、他者のことばを適切に聞き届けるためには、無私の立場に立つのではなく、自己と他者の関係を積極的に考慮にいれなければならないという (SSI, 88; 132f.)。と同時に、自己と他者の関係性についての自分の思いなしを固定化せず、他者による訂正の余地を残しておかなければならないことも強調される。人間的現存在間の関係は、事物と事物のあいだの関連性 (たとえば鍵と鍵穴の関連性) とは違い、本来、双方が自律性を発揮してみずから他方に関わることができるといふところに特徴がある (SSI, 81ff.)。このような「ある者と他者との無制約的な自律性を『承認する運動』」を (SSI, 87) 十分に発揮できれば、訂正の予知は適切に確保され、こがらについてのよりよい理解が得られることになる。

それゆえ、あるこがらに対するある者と他者の理解の訂正可能性が確保されるのは、双方が自律性を発揮することにより、関係の相互性 (Gegenseitigkeit) が確保されている限りのことであって、他者の自律性に対する承認が毀損され、こがらについての適切な理解が達成できない場合には、ある者の他者に対する関わりは一方的的 (einseitig) だと称されることになる。

一方向的な関係は、ある者が他者に関係するのではなく、ある物 (Etwas) に関係する場合ならばどこでも存在し、またその場合のみ存在する (SSI, 78)。

したがって、ここでは他者の人格性が否定され、物化が生じているということになる。コゼレックはこうした議論を念頭において、対立対の一方向的適用について論じていたと思われる。ギリシヤ人と野蛮人にせよ、キリスト教徒と異教徒にせよ、人間と非人間にせよ、いずれも共同世界についての理解が前者によって一方向的になされるものに限定され、後者にははじめから訂正の余地が認められていない。そこでは、後者の自律性が否定され、あたかも物であるかのように扱われるという抑圧的な事態が生じることになる。これが人間におけるアンタゴニスティックな歴史に残酷な拍車をかけているということになる。

5. 結論

本稿では、コゼレックの歴史学的人間学に認められるハイデガー学派の影響を整理した。その結果明らかとなったのは、コゼレックの歴史学的人間学がレーヴィットの哲学的人間学による一貫した影響のもとで成立したと思われることである。特に歴史学的人間学で重要視されている対立対という観念は、レーヴィットの哲学的人間学、もう少し限定すると、その共同相互存在論に由来するものと解しえた。コゼレックがこれほどまでに共同相互存在論を援用したのは、世界が理解に即して分節化されることを指摘するにとどまらず、世界の分節化様式における水路づけを積極的に語るためのツールを必要としたためであろう。

先行研究においては、非対称的対立概念が登場するに至った原因を、コゼレックが博士論文執筆以来、密な交流を持っていたカール・シュミットの影響に求める論者もいる。これは間違いないところであり、無視できない所見である¹²⁾。なるほど、対立対にも非対称的対立概念にも、「友と敵」というカテゴリーが含まれていた。本稿の整理が正しければ、コゼレックはレーヴィット由来の共同相互存在論、あるいはそこに含まれた相互承認論を、シュミットのな友敵区別論と接合しようとしていたことになるが、そ

の射程と意義を測るには稿を改めて考察を続ける必要があるだろう。

注

- (1) 本稿は二〇一八年に行われた日本現象学・社会科学会第三五回大会での発表に加筆修正を加えたものである。
- (2) R. Koselleck, *Historik und Hermeneutik, Zeitschichten*, Suhrkamp, 2003. 同著からの引用に際してはZSと略記し、頁数を付す。
- (3) コゼレックに対するレーヴィットの影響関係をよく意識した先行研究としては、N. Olsen, Reinhart Koselleck, Karl Löwith und der Geschichtsbegriff, *Zwischen Sprache und Geschichte*, (Hg.) C. Dutt, R. Laube, Walsstein Verlag, 2013.
- (4) H.G. Gadamer, *Historik und Sprache, Gesammelte Werke 10*, Mohr Siebeck, 1995. ガタマー全集からの引用に際してはGWと略記し、巻号と頁数を付す。なおこの論文はコゼレックのZSにも再録されているが、全集版の方は増補され論旨が明瞭になっているので、こちらから引用する。
- (5) K. Löwith, *Das Individuum in der Rolle der Mitmenschen, Drei Masken Verlag*, 1928. (『共同存在の現象学』、熊野純彦訳、岩波文庫(二〇〇八年)。この著作はハイデガーの指導のもの準備されたレーヴィットの教授資格論文をもとにしたものである。以下、引用に際しては全集版(『Sämtliche Schriften I, J.B. Metzler, 1981)を用い、SS1と略記して頁数を付す。
- (6) オルセンは「コゼレックがレーヴィットの共同相互存在論から影響を受けたというアイデアを提示している。本稿ではこの示唆を具体的に論証した。N. Olsen, Reinhart Koselleck, Karl Löwith und der Geschichtsbegriff, S.243f.
- (7) 『真理と方法』の結論は「歴史学も文献学も、テクスト資料やそれを取り巻くさまざまな資料をひとつの意味の全体に向けて「理解 (verstehen)」しようとする実践であることに変わりなく、その意味で「歴史学的理解は一種の大規模な文献学である」とわかる」(GW1, 345)というものであった。C. Duttに「歴史学＝広義の文献学テーゼ」批判へ水を向けられた晩年のコゼレックは、なお「あらゆる歴史は、資料が語ることができることよりもより多いかより少ないのです。このことは確かにあらゆるものの歴史における出来事の構造に当てはまります」と答えている。Koselleck, Dutt, *Erfahrene Geschichte*, Universität Winter Heidelberg, 2013, S.50f.
- (8) 対立対が「前言語的・言語外的構造」と言い換えられているのは注目に値する。「構造」という用語の使用には、長期的に持続し変化する地理的条件や社会組織の編成などに着目して歴史記述を行おうとする、アナール学派のような社会史 (Sozialgeschichte) 研究の影響である。
- (9) 非対称的対立概念あるいは対立概念は、「概念史プロジェクトに関わる網領的な論文でしばしば言及されている (Koselleck, Richtlinien für das Lexikon politisch-sozialer Begriffe der Neuzeit, *Archiv für Begriffsgeschichte 11*, H. Bouvier u. co. Verlag, 1967, 87f. 『Reinbegriffe, Begriffsgeschichten, Suhrkamp, 2010.』。最初の例は、「理性と啓示、自由と専制、自然と文明、商業と戦争、道徳と政治、退廃と進歩、光と闇」をリストアップする五九年の『批判と危機』にまで遡れる (『Kritik und Krise, Suhrkamp, 1973, S.83.』)。この時期の対立概念については、コゼレック自身がH・ブルーメンベルクに対して行った説明を参考にすべからう (Vgl. G. Imbramo, *Der Begriff der Politik*, Campus, 2018, S.119ff.)。

- (10) レーヴィットは *Beziehung* と *Verhältnis* を厳密に分けて用いている。前者は事物間のかかわりを表すのに対して、後者は人格間のかかわりを表すものである (SSI, 75f)。
- (11) 会社における雇用関係に基づいて「雇用主」と「被雇用者」という名称が用いられるか、「搾取者」と「人的資源」という名称が用いられるかの違いが出てくるといふ例が挙げられている。
- (12) N. Olsen, *History and the Plural*, Bergahn, 2014, p. 188. シュミットの論文「フーコー・プロイス」冒頭部には対立概念という文言が登場しており、これがコゼレックに示唆を与えたのだらうと指摘される。

Historical Anthropology of Reinhart Koselleck

ENDO Kenju

This paper discusses the historical anthropology of Reinhart Koselleck. Koselleck developed historical anthropology, which describes antagonistic historical events caused by the interpersonal relationships. Koselleck's historical anthropology is influenced by K. Löwith's philosophical anthropology, which criticizes Heidegger's Daseinsanalysis as being solipsistic through analyzing the interrelationships of human existences. According to Koselleck, antagonistic historical events can be described by the notion of "Oppositionspaar" which means some binary coding of hostile existential possibilities. History is for him nothing but the study of the prelinguistic structure suggested through this coding. On the other hand, H.G. Gadamer considers the nature of Oppositionspaar as included within linguistic activities, to understand history as a branch of hermeneutics. But, what Koselleck is trying to reveal with the prelinguistic characteristics of Oppositionspaar is the asymmetry of interpersonal relationships as the lack of recognition, which at once distorts how to use language in drawing out others and accelerates the antagonism.